

Cóng wú suǒ yù  
从吾所欲おう たも  
其の往を保たざるなり〈述而第七〉うえだ あつ お  
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

貧富について論及した個所が『論語』には幾つか見られます。例えば次のようなものです。「富而可求也，虽執鞭之士，吾亦为之 (Fù ér kě qiú yě, suī zhí biān zhī shì, wú yì wéi zhī)」（富にして求むべくんば、執鞭の士と雖も、吾れ亦た之を為さん）〈述而第七〉。富というものが、もし求めて得られるものなら、執鞭の士というものになってもかまわない。執鞭の士とは耳慣れない言葉ですが、これには諸説があります。市場の警備員、貴人の御者、主君の露払い等々。何れも鞭を扱う職業です。身分は低く、人からは嫌われる。必ずしも誰もがなりたがるものではありません。しかしそれが出世の糸口になるものなら、そこから始めるのも悪くはない、ということでしょうか。

わが日本には、主君の草履取りから始めて、太閤にまでなった人物もいます。当時の日本と同様、混乱期にあった孔子の時代にも、そのようにして出世した人も少なくなかったのかもしれませんが。しかし誰もがそうなるとは言えません。これには運と才、そして何よりも富への執着心が必要です。

孔子に運と才と執着心が欠けていたかという点、必ずしもそうとは言えません。B.C.552年、魯の国で生まれた孔子は3歳で父を失い、今でいう母子家庭で育ちました。しかも両親は正式に結婚した仲ではないといわれています。母親は巫女でしたが、その母も17歳で亡くしています。孤児となった孔子は倉庫番や牧場の管理人をしながら、独学で学問に励み、53歳の時には大司寇(刑務長官)にまで上り詰めます。刑務を司る最高位の職です。この頃すでに、その理想に共鳴し、その人望を

慕う様々の階層の弟子たちが孔子の門を叩いています。運氣と才覚、それに執着心が加わらなければ、なかなかこうはいきません。

彼はさらに続けます。「如不可求，从吾所好 (Rú bù kě qiú, cóng wú suǒ hào)」（如し求むべからずんば、吾が好む所に従わん）。しかしその富を求めても得られないというのであれば、私は自分の好みに合うことをやりたい、と。運氣と才覚に恵まれた孔子が、努力の末に得たものは政府高官の地位でした。しかし孔子の執着心はというと、別のところにありました。一言で言えば、それは自分の好む所を追求したい、ということです。自分の好む所とは何か。それは学問の道です。武力や威圧ではなく、文化と外交の力で社会秩序の回復を図ること。孔子が学問を志す目的はそこにありました。

一方、現実の政治は孔子の掲げる理想からあまりにもかけ離れたものでした。王権は無視され、民は疲弊し、まさに弱肉強食の時代が始まりました。失われた秩序を取り戻すにはもはや武力に頼るしかない、多くの人たちがそう思い始めた時代です。孔子は破壊された秩序の回復のため、あらゆる手段を尽くしましたが、貴族豪族たちによって全く阻まれ、主君からも無視されます。そこでついに、せつかく得た官職をなげ棄て、弟子たちを引き連れ、理想に共鳴する君主を探す求職の旅に出ました。しかし彼を受け入れる君主は現れず、逆に生命の危険にすら何度かさらされました。それでもなお、理想を語ることをやめませんでした。何ゆえに?…… それこそが「吾が好む所」であったから、ということです。

(‘わんりい’「中国語で読む漢詩の会」講師)